

は浅水し中生前の跡合に思ひ白岩迄お送りし取て返し
主従五千余人六十里越に越りて庄内へ名きくら所向ふの
坂を馬武者二十騎もちり打てのゆる人あり下部を走ら
せ言ふ者誰人そ庄内の中加勢ある同道申さんと
いふをきかれ是は沼の平の住人東海林四郎大末同く新左工
門あり名の中加勢に依て義光公に出陣をお待し折に諸勢
取調の爲一あ日申延引の由故若し其間に軍破れず越
後勢定めて越の事も何ん代と先一日も早く先陣を心
かけ彼向はしる所に貴族勢に追付れしより庄内表
北谷より如何にと聞ひかれは云番急しこれとも軍の次方語が

んと云ふるに四郎大末も急しうきまゝに云双つて語り玉ひと
馬引あせ云ふれも云番もせしと二騎急双つて志津が
田変候と云おきてはしねえ人供或者僅まれあとり
騎を誘ふなりと郎おもしろこれに時早く尾浦を見
張んとて急ぎはしるし打とりたりかゝて大山の方をい渡せ
し黒雲の空を渡り煙上る所見ふ東海林四郎大末是を
見そ是はいか様城なりと所家も煙をみる見そなり打て
人とも一勇に進んで地よりなり云番なりと以煙尾浦
の城にお高き言早落城とおんて四郎大末後如何
思ふれし味方敗軍は必定あり合度い後詰を待たし